HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語における「結束性」をめぐって(1)
Author(s)	林, 馨子
Citation	独語独文学科研究年報, 21, 30-45
Issue Date	1995-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25994
Type	departmental bulletin paper
File Information	21_P30-45.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ドイツ語における「結束性」をめぐって (1)

林　馨子

0. はじめに

本論は、ドイツ語における不定詞節に見られる、「結束」現象について、考察したものである。この問題は、早くから議論されているにもかかわらず、何をもって「結束」とするのか、あるいは、「結束」の実態とは何か、ということで、いまだ議論がある。この「結束」という概念は Bech (1955)によって、はじめて提示され、現在も、この研究が、全ての研究の基礎になっている、と言える。そして、その「結束性」は、どれだけの条件を必要とするのか、ということが議論されるわけであるが、必ずしも、Bech (1955) が意図していたように、解釈されている訳ではない。したがって、ま ず、やはり Bech (1955) を細かく理解することに努める。その際には、曲解をできるだけ避けるため、Bech (1955) 自身の言葉を引用し、彼が意図していたことを、摑もうと思う。これが、第一章と第二章である。その上で、これに対して、批判をする。その際、有効な仮説として、再分析仮説を取りあげるが、その仮説にもさらに批判を行う。そして、「再分析」という名のもとに、詰め込まれている操作を、より、一般的な操作に分解する。そして、動詞の各グループの違いを、「要素の取り出しやすさ・取り出しにくさ」によって、統一的に説明することを試みる。これは、生成文法内の、どの理論にも、特にくみしないものであるので、何かの名称に特定することはせず、埋め込まれた節の「殻のかたさ」の度合いとして、表した。

文中の例文で、/.../で番号が記されているものは、最後に例文一覧として、その出典とともに掲げてある。

1. 「結束」の概念

Bech (1955) は、「結束」(Kohärenz) という概念を、どのように規定していたのか。「結束」という言葉は、その後も、他の研究者によって使われているが、その意味は、Bech 自身が意図していたものから、ずれているように思われる。どこまでの条件をつければ、「結束」と言えるのか、ということを議論する前に、まず、Bech 自身がどのように考えていたのかを、明らかにしておく必要があるだろう。そうすることによって、Bech の理論に欠けているものが何なのか、ということもつきとめられるだろう。

多様な現象を、統一的に説明するために、Bech (1955) では、いくつかの概念が導入されている。今、問題にしようとしている「結束」という概念も、そのうちの一つであるが、この他にも、いくつかの概念がある。「結束」という概念も、この概念を基にして規定されているので、それを説明せずに済ますことはできない。この説明は、Bech 自身によってだけではなく、その他の論文でも紹介さ

れているが（Evers (1975)、Stechow (1984)、Grewendorf (1987, 1988)、Hayashi (1994) 参照）、Bech の「結束」をはっきりと理解するために、もう一度ここで取りあげたいと思う。なお、これより後、Bech (1955, 1957) からの引用、参照に関しては、ページ数ではなく、セクション（§）数によって、その箇所を示すことにする。なお、この二冊は、1983年に、一冊にまとまって再刊されている（文献表の Bech (1983)）。

1.1 不定詞の分類

まず Bech は、いくつかの不定詞の形を、「レベル」(Stufe) と「状態」(Status) という二つの軸に従って、分類している。Bech が示している次の表を見てみよう。

(1-1)

	1. stufe	2. stufe
	supinum	partizipium
1. status	lieben	liebend(-er)
2. status	zu lieben	zu lieben(d-er)
3. status	geliebt	geliebt(-er)

Bech (1955: § 1)

ここで、まず区別されているのは、二つのレベルである。第一レベルは、「スピーヌム」(Supinum)、第二レベルは、「分詞」(Partizipium) と名付けられている。また、この二つのレベルは、それぞれ三つの状態に分けられている。表を見てわかる通り、第一状態とは、何も付かない「純粋」(rein) 不定詞 'lieben' と現在分詞 'liebend'、第二状態とは、zu のついた不定詞 'zu lieben' と未来分詞 'zu liebend-'、そして第三状態とは、過去分詞 'geliebt' を指す。

この本において主に扱われているのは、第一レベルのスピーヌムであるが、では、この二つのレベルはどのように区別されているのであろうか。第二レベルの分詞は、形容詞と同じ性質（性、格、数、屈折形、比較形）を持っているのに対して、第一レベルのスピーヌムは、このような性質を持っていない (Bech (1955: § 3))。これに対して、「支配」(Rektion) と「一致」(Kongruenz) が第一レベルに特有の現象である。この二つは、不定詞の「状態」に関するものであるが、このうち、支配について見てみよう。これは、次の 1.1.2 の従属連鎖が、この状態支配によって規定されるからである。

(1-2) Ein bestimmter status kann von irgend einem benachbarten element, z.b. von einem verbum, regiert sein.

ある「状態」は、その隣にある何か一つの要素、例えば一つの動詞によって、支配されうる。
Bech (1955: § 5)

Bech によって示されている例にそって見てみると（§ 5）、wollen という動詞は、第一状態を支配し、wünschen という動詞は、第二状態を支配する。従って、

(1-3) (a) er will kommen
(b) er wünscht zu kommen

という文は可能であるが、

(1-4) (a) *er will zu kommen
(b) *er wünscht kommen

とは言えない。これは、次の文が示すように、

(1-5) (a) er holt den Jungen
(b) er hilft dem Jungen

'holen' が常に対格を、'helfen' が常に与格を支配するのと似ている。(1-3)(1-4)の「状態支配」は、(1-5)の「格支配」と同じような性質を持つものなのである。動詞は、常に名詞のある格を支配しているように、常に動詞のある「状態」も支配している、と考えるのである。

この「状態支配」が、「状態一致」（Bech (1955: § 5) 参照）と並んで、第一レベル、スピーヌムの主要な特徴である。このうち、支配関係が、次に示す「従属連鎖」(hypotaktische/subordinative Kette) を規定することになる。

1.2 従属連鎖 (hypotaktische/subordinative Kette)

1.1 では、あるスピーヌムは、ある動詞によって状態支配される、ということを見た（例文(1-3)(1-4)参照）。しかしこれは、二つの動詞に関してのみあてはまるものではない。ある動詞によって支配された、あるスピーヌムが、別のスピーヌムを支配することもある。次の例を見てみよう。

(1-6) Ich habe nach drei Jahren gebeten, in der Einzelhaft bleiben zu dürfen

Bech (1955: § 16)

この文において、動詞の間の支配関係は、次のようになっている。

(1-7) 'habe'－第三状態支配→ 'gebeten' －第二状態支配→ 'zu dürfen' －第一状態支配→ 'bleiben'

このように、状態支配の関係によって成り立っているような、二つ以上の動詞の連鎖を、従属連鎖という (Bech (1955: § 16))。

Bech (1955) というのは、ある一つの従属連鎖内の動詞の関係について、述べている巻である。これに対して、従属連鎖と従属連鎖の間の関係について述べているのが、Bech (1957) である。従属連鎖が二つあるような例には、次のようなものがある。

(1-8) ...daß Klara sich ein Kursbuch gekauft hatte, um den Zug verfolgen zu können
Bech (1957: § 245)

ここでは、'hatte' と 'gekauft' から成る従属連鎖と、'zu können' と 'verfolgen' から成る従属連鎖がある。この二つは、一つの従属連鎖にまとめられることはない。一つめの連鎖の 'gekauft' は、二つめの連鎖の 'zu können' を支配しているわけではないからである。'zu können' は第二状態にあるのだが、この第二状態というのは、'gekauft' から支配されて、選ばれているのではなく、前置詞 'um' から支配されているものである (Bech (1957: § 245))。従って、従属連鎖は、この二つの動詞の間で切れることになり、二つの連鎖と見なされるのである。

では、一つの従属連鎖内の関係について、「結束」(Kohärenz) の概念を見ていくことにしよう。なお、Stechow & Sternefeld (1988: 408) は、次のような記述をしている。

(1-9) Rektion, insbesondere Statusrektion ist nur innerhalb des Satzes möglich.
支配、特に、状態支配は、「文」の中でのみ可能である。

ここで彼らが、「文の中」と言っているのは、次に示す、「結束域の内部」と同じ意味である。つまり、支配関係の切れ目が、「結束域」の切れ目と考えている。しかし、結束していない節どうし、例えば、(1-6)の 'Ich habe nach drei Jahren gebeten' と 'in der Einzelhaft zu bleiben' のようなものだが、その節の間にも、支配関係は途切れず存在することは、(1-7)で示した通りである。彼

らは、Bech (1955) の状態支配を誤解していると思われる。結束域の境界に、状態支配の有無は、全く関係がない。これを新たな条件とする理由が、何も見当らないので、ここでは、考慮しない。

1.3 結束 (Kohärenz)

(1-7)で見たように、一つの従属連鎖の中には、いくつかの動詞が含まれている。この動詞は、それぞれ、「動詞域」(Verbalfeld) を形成している。この動詞域には、その動詞自身と、その動詞に属するものが含まれる。これを例で見てみよう。

(1-10) ich bitte ihn, morgen zu kommen

Bech (1955: § 36)

この文は、一つの従属連鎖から成り立っている。定形の動詞 'bitte' が、不定詞 'zu kommen' の第二状態を支配しているからである。そして、この二つの動詞は、それぞれ、動詞域を形成している。一つめの動詞域は 'ich bitte ihn' であり、もう一つの動詞域は 'morgen zu kommen' である。この動詞域の間の関係を考えていく上で生じてくるのが、結束という概念である。この結束というのが、厳密に、どのような場合を指すのか、ということが、問題になってくるのであるが、まず、Bech 自身がどのように考えていたのかを明らかにし、その上でその問題を考えることが必要であろう。

「結束域」 (Kohärenzfeld) は、いくつかの、少なくとも一つ以上の動詞域から成り立っている。そして、一つの結束域には、動詞の集まりから成る部分の「終端域」(Schlußfeld) と、それ以外の部分の「残余域」(Restfeld) がある。残余域とは、結束域から、動詞の集まりである終端域を引いた「残り」だと考えてよい。結束域がどのようなものであるのかを示すために、Bech は、まず多くの例を挙げている (§ 56) ので、私達も、その内のいくつかを見ていくことにしよう。例の中で既に、結束域と結束域の境目は破線 ¦ によって区切られ、また、それぞれの結束域内の終端域は、丸括弧 () によってくくられている。

(1-11) (a) ...weil sie auf Grund der Leistungen der Armee (hoffen konnten), ¦ die ausländische Konkurrenz (zu schlagen)

(b) ...damit niemand (wagen könne), ¦ an ihrer Unfehlbarkeit (zu zweifeln)

(c) ...daß du nicht (versucht hast), ¦ mich (zurückzuhalten)

上の例では、いずれの文においても、結束域は二つである。これは、文が破線 ¦ で二つに区切られていることからわかる。(a)を例にとって見てみよう。一つめの結束域は、'sie auf Grund der

Leistungen der Armee hoffen konnten'、二つめの結束域は、'die ausländische Konkurrenz zu schlagen' である。ここで、複数の動詞域が、同じ結束域に属しているような場合、これらの動詞域は「結束している」(kohärent) と言う (Bech (1955: § 58))。従って、'hoffen' と 'konnten' の作る動詞域は、同じ結束域に属しているので、結束しているが、'zu schlagen' の作る三つめの動詞域は、それだけで、一つの、独立した結束域を成している。そして、異なる結束域に属している動詞域どうしは、「非結束である」(inkohärent) と言う (Bech (1955: §58))。(a)の例をとってみると、'hoffen' と 'konnten' の作る動詞域は、結束しているが、それと 'zu schlagen' の作る動詞域は非結束である。

また、例文の中の丸括弧 () が示すとおり、一つめの結束域は、残余域 'sie auf Grund der Leistungen der Armee' と、終端域 'hoffen konnten' に分かれる。また、二つめの結束域に関しては、残余域は 'die ausländische Konkurrenz' であり、終端域は 'zu schlagen' である。(b)や(c)の例も、同じように、結束域、そして、その中の残余域、終端域が示されている。

ここで、結束域の確定に重要な役割を果たしていると思われるのは、動詞の集まりである終端域である。言い換えれば、終端域の数だけ結束域がある、と考えられそうである。では、どんな動詞の集まりが終端域を形成するのか、ということについては、単純に言えば、隣り合った動詞 (例えば (1-11a)の 'hoffen' と 'konnten') があれば、それが集まって、一つの終端域をつくり ('hoffen konnten')、それによって、一つの結束域を作る、と考えてよいのではないか、と思われる。逆に言えば、隣り合っていない動詞は、同じ終端域に属することはない ((a)の 'hoffen konnten' と 'zu schlagen') ので、別々の結束域を形成し、非結束と考えられそうなのである。「隣り合っていない」構造は、言い換えれば、「外置」(Extraposition) のある構造である ((a)では、'die ausländrische Konkurrenz zu schlagen'、(b)では、'an ihrer Unfehlbarkeit zu zweifeln'、(c)では、'mich zurückzuhalten' が、外置されていると考えられる) と言える。では、全く外置のない場合、結束域はいくつになるのか。

(1-12) ...daß Cynthia sie in ihrer Klosterzeit (gemalt hatte)

Bech (1955: § 56)

私達の予想どおり、Bech は、この例を、結束域が一つの例として示している (§ 56)。'gemalt' と 'hatte' は隣り合わせで並んでいるので、同じ終端域に属し、これによって、それぞれの動詞が作る動詞域は、同じ結束域に属する。従ってこの文には、結束域が一つしかない。では、動詞が隣り合わせで並んでいれば、どんな場合でもその動詞域どうしは、結束しているのか。つまり、動詞域が結束、非結束になる条件とは、動詞の並び方という条件だけでよいのだろうか、それで十分なのだろう

か。実は、これが問題になる点である。これは Bech が、(1-11)や(1-12)のような例を出した後、その結束域に伴う特徴のいくつかを挙げていることによる。動詞の配列だけではなく、そこに挙げられている特徴も満たさなければ、動詞域が結束しているかどうか、ということを決められない、という見方が出てくるわけである。そこでまず、Bech によって挙げられている、結束域に伴う特徴について見ていこう。

2. 「結束」の概念をめぐる問題

2.1 結束域に伴う特徴

まず、Bech (1955) によって挙げられている、五つの特徴を、通して見てみよう。

2.1.1 残余域の配列の変化 (topologische Umstellung der Restfeldglieder)

これについて、Bech の記述を見てみよう。

(2-1) ...innerhalb eines kohärenzfeldes stehen die glieder der verschiedenen verbalfelder zwischeneinander, ...
一つの結束域内では、異なる動詞域の構成要素が入りまじる。

Bech (1955: § 57)

これに Bech は次の例を示している。

(2-2) daß ich ihm nicht (helfen konnte)

動詞 'konnte' に関する動詞域は、'ich ... nicht ... konnte'、動詞 'helfen' に関する動詞域は、'ihm ... helfen' である。ここでは、二つの動詞域が「入り組んで」いる。'...' の場所には、違う動詞域の要素が入ってくるのである。

2.1.2 境界休止 (Grenzpause) の有無：

結束域と結束域は、休止によって分けられる。この休止は、(1-11)では破線 ¦ で示されていたものであるが、

(2-3) Dagegen besteht keine solche pausenabgrenzung zwischen den verbalfeldern des einzelnen kohärezfeldes.

それに対して、個々のの結束域に属する動詞域と動詞域の間には、そのような、休止による境界はない。

Bech (1955: § 57)

その文に結束域が一つしかない場合、境界休止がおかれないことは、結束域が一つだとされている例文(1-12)に、そのような休止を示す破線 ¦ が見られない、ということにも表れている。

2.1.3 終端域の構成 (Aufbau des Schlußfeldes)

ある一つの終端域は、どのように構成されているか。その中にある動詞の配列が、その動詞の「状態」(1.1 参照) と関係づけて、考察されている。このことが、結束域の特徴にとって、どのような意味があるのか。ここで考察されている型にあてはまらない動詞の連鎖は、(隣り合っているにもかかわらず) 一つの終端域には属さず、従って、そこには、もう一つ (、あるいはそれ以上) の終端域が存在することになる。これは、必然的に、もう一つ (、あるいはそれ以上) の結束域が存在する、ということになるので、この終端域の動詞の配列も、結束域を示す一つの特徴と言えるだろう。

まず初めに、一つの終端域が、「上部域」(Oberfeld) と「下部域」(Unterfeld) に分割されうることが、述べられる (Bech (1955: § 60))。では、先に例を見てみよう。

(2-4) (a) ...daß man ihn hier (läßt liegen bleiben)

(b) ...daß man ihn hier (kann lassen liegen bleiben)

Bech (1955: § 61)

(2-5) (a) läßt liegen bleiben
V_1 V_3 V_2
OF UF

(b) kann lassen liegen bleiben
V_1 V_2 V_4 V_3
OF UF

(2-5)の(a)(b)は、それぞれ、(2-4)の(a)(b)の終端域の動詞の並び方を図示したものである。動詞の左下についている数字は、動詞の支配関係を示し (Bech (1955: § 17) 参照)、数字の小さい方が、大きい方を支配する (V_n が V_{n+1} を支配する) ことを表しているものである。従って、(a)では、'läßt' が 'bleiben' を支配し、この 'bleiben' は、'liegen' を支配していることがわかる。(b)

では、'kann' が 'lassen' を、その 'lassen' が 'bleiben' を、その 'bleiben' が 'liegen' をそれぞれ、支配している。また、OF は「上部域」(Oberfeld) の、UF は「下部域」(Unterfeld) の略である。

この動詞の並び方は、「動詞入れ替え」(Verb-Umstellung)、あるいは、「代替不定詞」(Ersatzinfinitiv) と呼ばれるものである。では、上部域と下部域の関係、および、それぞれの特徴について、Bech の考えを見ていこう。

①上部域が現れる条件：

上部域は、下部域を前提とする、ということが指摘されている（§ 60）。つまり、上部域が現れるためには、常に、下部域がなければならない。逆に言えば、下部域だけが現れて上部域が現れないことはある。下のような「普通の」並び方をしている終端域には、下部域はあるが、上部域はない。

(2-6) (a) ...daß man ihn hier (liegen bleiben läßt)

Bech (1955: § 60)

(b) liegen bleiben läßt
$\underbrace{\quad V_3 \qquad V_2 \qquad V_1 \quad}_{UF}$

②動詞の並び方：

例文(2-4b)からわかるように、上部域では、支配する動詞が支配される動詞の前に位置するのに対して、下部域では、支配される動詞が、支配する動詞の前に位置する（§ 60）。

③上部域に含まれる動詞の「状態」：

上部構造には、定形、または、第一状態の動詞しか含まれない（§ 60）。

この三つを満たすような配列を持つ動詞は、同一の終端域に属し、従って、それぞれの動詞の作る動詞域は、結束している。このことは、Grewendorf (1988) の解釈と関連して、もう一度、3.1 で考える。

2.1.4 凝集表現 (Kohäsion)

ここで言われている凝集表現とは、否定表現のうちの、あるグループのことで、下のようなものがある。

(2-7)

a		b	c
niemand	=	nicht +	jemand
nichts	=	nicht +	etwas
kein	=	nicht +	ein(ig-)
nie	=	nicht +	je
nirgends, nirgendwo	=	nicht +	irgendwo

Bech (1955: § 80)

表の a の表す意味を α、b の表す意味を β、c の表す意味を γ とすると（§ 80）、次のことが言える。なお、F は動詞域を表す記号で、F′ と F″ に関しては、F′ に属する動詞が F″ に属する動詞を支配する、という関係を表す（§ 18 および § 36 参照）。

(2-8) Wenn nun F′ das inhaltselement β umfaßt, und F″ ein inhaltselement vom typus γ, so wird $\beta+\gamma(=\alpha)$ durch ein wort a ausgedrückt, wenn F′ und F″ kohärent sind; und wenn F′ und F″ inkohärent sind, so wird $\beta+\gamma(=\alpha)$ durch zwei wörter, b und c, ausgedrückt.
動詞域 F′ が β という意味要素を含み、動詞域 F″ が γ のタイプの意味要素を含んでいる時、F′ と F″ が結束しているならば、$\beta+\gamma(=\alpha)$ という意味要素は、a という一語で表現され、F′ と F″ が非結束であるならば、$\beta+\gamma(=\alpha)$ という意味要素は二つの語 b と c で表される。

Bech (1955: § 80)

次の例を見てみよう。

(2-9) (a) ...daß er nichts Besseres (zu tun vermag)
(b) ...daß er nicht (vermag), ¦ etwas Besseres (zu tun)

Bech (1955: § 80)

'nicht' が表す意味を [nicht]、'etwas' が表す意味を [etwas] としよう。(a)のように、'zu tun' の形成する動詞域と 'vermag' の形成する動詞域が結束している時、'vermag' の作る動詞域にある [nicht] は、'zu tun' の作る動詞域にある [etwas] と「凝集」して、'nichts' という一語で現れる。一方、(b)のように、この二つの動詞域が非結束である場合は、二つの意味要素 [nicht] と

[etwas] は、「凝集」せず、それぞれ独立して、それぞれの動詞域において 'nicht'、'etwas' として表現される。従って、このような凝集表現ができるかどうかも、動詞域の結束性を示す特徴であると考えられるのである。

2.1.5 不定詞節に関係詞が属する関係文

この現象は、現在、「先導構文」あるいは「ねずみ捕り構文」(Rattenfängerkonstruktion) と呼ばれているものである。関係詞が、ある動詞に支配されている不定詞の作る動詞域に属する場合（あるいは、この不定詞の作る動詞域と結束している動詞域に属する場合）、この関係詞が、その不定詞を「引き連れて」、前に移動できるかどうか、ということが問題になっている。まず、移動可能な例「引き連れていける」例を見てみよう。

(2-10) ...ein Umstand, den zu berücksichtigen er immer vergißt,

Bech (1955: § 81)

(2-10)では定形の動詞 'vergißt' が、第二状態の不定詞 'zu berücksichtigen' を支配している。'ein Umstand' を指す関係詞 'den' は、'zu berücksichtigen' が形成する動詞域に属している。そして、この 'den' が前に移動する時に、自分が属している動詞域の動詞、つまりここでは 'zu berücksichtigen' も「連れていく」というものである。このねずみ捕り構文が許されない例として Bech は次のような例を挙げている。

(2-11) (a) *...ein Umstand, den berücksichtigen er immer muß,
(b) *...ein Umstand, den zu berücksichtigen er immer pflegt,
(c) *...ein Umstand, den berücksichtigt er immer hat,

Bech (1955: § 81)

このねずみ捕り構文と、結束性の関係について、Bech は次のように述べている。

(2-12) Wenn F' und F" hier inkohärent sind (...), so kann dies kohärenzfeld in vorgerückter stellung — unmittelbar vor N(0) — stehen, während ein entsprechendes vorrücken der betreffenden sup.-felder nicht möglich ist, wo F' und F" kohärent sind.
（支配する）動詞域 F' と（支配される）動詞域 F" が非結束である場合（中略）、この結束域

（＝関係詞が属する結束域）は、前方、つまり、N(0)（＝主語）のすぐ前、に移動できるが、F′と F″が結束している場合、このスピーヌム域（＝スピーヌム（????参照）が形成する動詞域）が前方へ移動することは、不可能である。

Bech (1955: § 81)

これを(2-10)の例にあてはめて考えてみよう。この文では、支配されている結束域 'den zu berücksichtigen' は、主語である 'er' の前に移動できるので、この 'den zu berücksichtigen' は、それを支配する動詞域 'er immer vergißt' とは非結束である。しかし、(2-11)の場合、そのような移動は不可能なので、支配する動詞域 'er immer muß/pflegt/hat' と、支配される動詞域 'den (zu) berücksichtigen' は、結束していることになる。

以上、Bech 自身が述べている、結束域に伴う五つの特徴を概観した。ところで、ここで問題になるのが、結束性の十分条件は何か、ということである。例えば Grewendorf (1988: 272) は、枠構造の内側に不定詞節が位置することが、結束性に対する十分な基準である、という捉え方を否定している。動詞の並び方、つまり、外置されているかどうか、ということだけでは、（非）結束性を示すのに、不十分である、と考えている。しかし、Bech 自身は、(1)外置されているかどうか、という条件が第一であり、(2)外置されていない、というだけで、結束性を示すのに十分であり、(3)外置されていなければ、すべて結束していると言える、と考えていたようである。これは、Bech 自身の言葉を、そして、論の進め方を追っていけば明らかになる。だから「外置」＝「非結束」、「外置されない」＝「結束」、と捉えられても仕方がない。その意味で、Grewendorf の上のような批判は、もし、それが、Bech の意図した「結束性」について言っているつもりなのだとすれば、正しくないと言えよう。それを確かめるためにも、今述べた三つの点が明らかになると思われる Bech の言葉を追ってみよう。

2.2 Bech における外置の条件と他の特徴

2.2.1 「外置されているかどうか、が第一条件」

Bech (1955) で気が付くことは、2.1 で挙げた特徴は、外置されているかどうかが、はっきりとわからない場合に、持ち出されていることが多いということである。次の例を見てみよう。

(2-13) Ich versuchte, mir mein Erstaunen nicht anmerken lassen. /1/

このような文では、定形の動詞が第二位にあるので、枠構造がはっきりしない。だから、次のどちら

の形をしているのか、判断できない。

(2-14) (a) [Ich versuchte [mir mein Erstaunen nicht anmerken lassen]]
(b) [Ich versuchte $\underline{t_i}$] [mir mein Erstaunen nicht anmerken lassen]$_i$

このように、外置されているのか、されていないのか、はっきりしないときに、いわば、「補助手段」として使われているのである。それは、例えば、次の文に表れている。'V' = V_0' とあるのは、(2-13)のような形をしている場合を指している（なお、下線は筆者による）。

(2-15) Um die situation V' = V_0 auf befriedigende weise behandeln zu können, müssen wir uns mit einem bisher nur ziemlich oberflächlich berührten thema beschäftigen, und zwar mit der topologie der restfelder: ...
V' = V_0 であるような状態を、満足できるほどに論じるためには、これまで、かなり表面的にしか触れてこなかったテーマ、つまり、残余域の配列を取りあげなければならない。
Bech (1955: § 69)

このように、「はっきりしないときの補助手段（あるいは発見手段）」として示されているものには残余域の配列の特徴（§ 79, 119, 181, 196, 230）、境界休止の有無という特徴（§ 73, 74, 77, 119, 195, 207, 230）、そして、凝集表現という特徴（§ 120）がある。もちろん、この特徴が現れるのは、V' = V_0 の場合だけではない、と述べられているが、その場合は、動詞の位置、つまり、外置されているかどうかということも明らかであり（§ 121）、これらの特徴がなければ、結束性は示されない、という類のものではない、と言えるであろう。そして、

(2-16) Wo V' ≠ V_0 ist, kann natürlich in der regel kein zweifel über die art der verbindung von F' und F'' bestehen.
もちろん普通は、V' ≠ V_0 の場合、F'（支配する動詞域）と F''（支配される動詞域）のつながりの種類については、疑問をさしはさむ余地もない。
Bech (1955: § 214)

このように述べていることを見ても、やはり、動詞の並び方、すなわち、外置されているかどうか、が第一条件なのだ、と思わざるをえない。

ただし、まだ触れていない特徴が、あと二つある。一つは、終端域の構成上の特徴（2.1.3）と、

もう一つは、ねずみ捕り構文（2.1.5）に関する特徴である。この二つは、他の特徴とは性格を異にすると思われる。まず、終端域の構成について。これは、他の特徴とは違って、動詞に直接かかわるものである。2.1.3 で述べたように、そこで示されている配列から外れる場合には、結束しているとは認められない。いくら、動詞が隣り合っていても、それは、ただ隣り合っているだけで、結束はしておらず、非結束であるとされるのである。この特徴が重要になるのは、次のような場合である。

(2-17) (a) er muß jedenfalls (versuchen), ¦ (zu arbeiten)
(b) er hat jedenfalls (versucht), ¦ (zu arbeiten)

Bech (1955: § 78)

どちらの文にも、動詞 'arbeiten' の目的語が存在しないので、二つの動詞 'versuchen/versucht' と 'zu arbeiten' は、隣り合っている。しかし、それでも、この二つの動詞は、同じ終端域に属さず、従って、この二つの動詞が作る動詞域は、結束していない、と Bech が考えていることは、文の中の破線や丸括弧からも明らかである。それは、この動詞の配列が、終端域の構成の型から外れているから（§ 78）なのである。そもそも、この終端域の構成に関する条件について問題がある、ということは、3.1 で述べるが、ここでは、そのことは考えない。ともかく、上の(2-17)の例のように、終端域の配列が、結束域の決定の前提となる場合があるので、前の三つの特徴とは違う性格を持つことだけを、ここでは示したい。

最後に、ねずみ捕り構文に関する特徴について。これは、外置が持っている性格と、全く同じ性格を持ったものだと、Bech は考えていたと思われる。それは、Bech が、このねずみ捕り構文を

(2-18) Die besondere art von inkohärenz
非結束の特別な種類

Bech (1955: § 182)

と捉えていることから、うかがえるであろう。つまり、外置の構造そのものが、非結束なのと同様、ねずみ捕り構文そのものが、非結束なのである。もし、Bech が非結束性を、「動詞が離れていること」を以て定めているのだとすれば、これは、何ら不思議なことではない。ねずみ捕り構文とは、まさに、動詞と動詞を引き離すような型だから、である。だから Bech にとって、ねずみ捕り構文とは他の特徴の持つ付随的な性格とは違って、非結束そのものである、と考えねばならないであろう。

2.2.2 「外置されていない、というだけで結束していると言える」

ここでは、結束域に特徴的な残余域の配列は、結束しているときは、いつでも現れなければならない、と考えられてはいなかったことを示したい。次の二つの文を見てみよう（下線は筆者による）。

(2-19) Die restfeldglieder können in den beiden konstruktionen in verschiedener reihenfolge stehen, ...
残余域の要素は、両方のタイプの文において、異なった順序で並ぶことがある。
Bech (1955: § 69)

(2-20) Wenn eine konstruktion, die zwei kohärenzfelder (...) enthält, solchermaßen umgeformt wird, daß diese zwei kohärenzfelder zu einem verschmelzen, so kann also eine topologische umstellung der restfeldglieder eintreten; ...
二つの結束域（中略）を含むような、ある文が、その二つの結束域が一つに融合するように作りかえられると、残余域の要素の配置が変わることがある。
Bech (1955: § 75)

(2-19)にある、「両方のタイプの文」とは、結束している文と、結束していない文を指している。この(2-19)(2-20)二つの文からわかることは、残余域の配列が変わることは、決して、義務的なものではない、ということである。だから、結束か非結束か、ということは、残余域の配列とは無関係なところで、決まっているのだ、と言える。これが、動詞の並び方、すなわち、外置（、および、2.2.1での考察を考慮するならば、ねずみ捕り構文）なのである。Bech (1955) においては、「結束」＝「動詞が隣り合わせ」、「非結束」＝「動詞が離れている」、であり、そこから外れる文は、全く存在しないからである。

実際、「結束している」として提示されている例には、残余域の配列が、全く入り組んでいない例がたくさんある。また、「結束している」として提示されている例の全てに、疑集表現が現れているわけでもない。やはり、Bech にとっては、動詞の配列によって、十分に結束性が示せると思われたのだ、と考えるのが自然であろう。

2.2.3 「外置されていなければ、全て結束である」

あとで扱うように、Grewendorf (1988) は、外置されていない文にも、いくつかの種類があって、結束しているとは言えないものもあることを指摘している。それが正しいかどうかは、そこで考えることにして、ここでは、Bech 自身は、外置されていないのに、非結束であるような例は考えていなかった。そのような例は、一つも挙げられていない。また、次のようなことも述べている。

(2-21) ...steht V′ also vor V″, wenn F′ und F″ inkohärent sind ...

（支配する動詞域）F′ と（支配される動詞域）F″ が非結束である場合、（支配する動詞）V′ は支配される動詞）V″ の前におかれる。

Bech (1955: § 66)

(2-22) F′ und F″ sind inkohärent. V′ und V″ gehören dann zu verschiedenen schlußfeldern, ...

（支配する動詞域）F′ と（支配される動詞域）F″ が非結束。その場合、（支配する動詞）V′ と（支配される動詞）V″ は、異なる終端域に属する。

Bech (1955: § 68)

(2-21)は、非結束の場合の動詞は、V′V″ の順番になると言っており、これは、例えば次のような文のことである。

(2-23) Ich habe nach drei Jahren (gebeten), ¦ in der Einzelhaft (bleiben zu dürfen)

Bech (1955: § 56)

ここでは、'gebeten' が V′ にあたり、'bleiben zu dürfen' が V″ にあたる。この文は、非結束の例であり、動詞は、V′V″ の順序になっている。非結束の場合、このような順序、すなわち、外置された形になる、と(2-21)は述べている。一方、(2-22)も、非結束の場合は、異なる終端域、つまり、(2-23)のような形になると述べているのである。Bech には、この形になることが、非結束ということであり、動詞が同じ終端域に属しているのに、その動詞域が非結束であるということは、全く考えていなかった。Bech には、「同じ終端域に属すること」＝「結束していること」、だったからである。そして、そのような場合には、先に挙げた特徴が、当然伴うものだ、と考えていたのであろう。同じ終端域に属していても、そのような特徴を示さない場合のあることを、Bech 自身が見落としていたのである。この見落としを、次で扱っていくことになる。

ここまでに示したかったことは、Bech (1955,57) の考え方、および、その用語の使われ方を理解することである。そうすれば、「外置されるかどうか」＝「結束しているかどうか」、と捉えることは、読む方の誤解から生じるものではなく、Bech 自身がそのように考えていたから、そのようにしか捉えられなかったのだ、という結論に達するであろう。（以下、次号掲載）

（大学院博士課程）